

田中澄江の ご中天の網島



わたしの古典

17



田中澄江の
心中天の網島

田中澄江の
心中天の網島



集英社

わたしの古典 こてん 17

田中澄江の心中天の網島 たなかすみえ しんじゅうてん あみじま

一九八六年三月二五日 第一刷発行

著者 田中澄江 たなかすみえ

編集 株式会社創美社

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

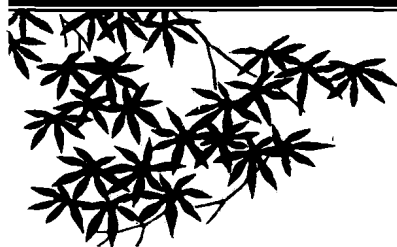
101 東京都千代田区一ツ橋二五十一〇
電話：出版部(〇三)三三八二八三一

：販売部(〇三)三三〇六一七一
：製作課(〇三)三三八二九六四

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 中央精版印刷株式会社

©1986 Sumie Tanaka. Printed in Japan ISBN4-08-163017-8 C1393
落丁・乱丁の本が万一にございましたら、本社製作課宛にお送りください。
送料・小社負担でお取り替えます。



わたくしと近松^{ちかまつ}

大阪市西区の四ツ橋近くの「文楽座」に、人形芝居を見に行ったのは、もう五十年以上昔の昭和五年（一九三〇）である。学校の関西旅行のプログラムに入っていた。その頃、私は、教室で近松門左衛門^{ちかまつもんざえもん}の作品の講義を受ける文科の学生であった。また自身、芝居が好きで、新劇、歌舞伎^{かぶき}、新派、民俗芸能、能などを、月に何回となく観^みて歩いている娘でもあった。「文楽」も大阪の四ツ橋に行く前に、東京での公演があるたびに、母と一緒に行った。

歌舞伎には、文楽の作品から取ったものが多いけれど、それらは人形で見えるほうが、より本当の人間らしさが出ているようで、それはなぜなのだろうと、よく自分なりに考えたものである。人形は何も言わない。人形の首はいつもその人間をただ一つの首であらわす。しかし、一つの人形の首が、その動きが、よろこびにつれ、悲しみにつれ、本当の人間以上の心をあらわしているように見えるのは、たぶん太夫^{たふ}の語りを耳にしながら、その語られるままの作品中の人間像を、人形の上に想像し、あるいは創造して観ているからではないだろうか。

語りの内容の味が濃ければ濃いほど、興味が湧^わき、共感をそそられ、作品の人間像と共に、喜怒哀楽を共にする。したがって、人形浄瑠璃^{じやうるり}のおもしろさは、もちろん人形を動かすことの技術の巧みさにもかかっているけれども、語られる内容が、いかに私たちに真に迫っ

た人間模様を描き出してくれるか、そのつくり方のうまさ、語られる言葉の美しさによるところが大きいと思う。その点、近松門左衛門の作品は、筋のたて方の緻密さ、人間描写の鮮やかさ、せりふの新鮮さで、どれ一つ読んでも、ほとほと溜め息が出る思いになり、他の浄瑠璃作品にくらべて拔群にすぐれていると思う。フランス演劇の中のモリエールや、イギリス演劇におけるシェークスピアと、ほとんど比肩し得るほどの豊かな才能であり、時代も十六世紀から十八世紀にかけて、社会的に民意昂揚のときを迎えていたことが共通している。

門左衛門が浄瑠璃を書いた時代には、徳川綱吉のように生類憐愍令などという悪政をしいていた將軍もいて、気の弱い者は生きるのがいやになってしまふのか、近松作品の世話物には自暴自棄とも言いたような破滅の仕方をするものが多い。それを生の人間の俳優が演じると、ついあまりの意気地なさにならざるを得ない。その言わぬ人形がやるいじらしさに、なにか許してしまいたくなくなってしまうのが不思議である。

人形という、自分では口をきくことも、動くこともできぬものが、人間の語りにあわせて、人間に動かしてもらって、必死に人間の生きるかたちを表現しようとしている。ひとびとは人形がいのちのないものであることを忘れて、そこにおのれがいのちをそそぎこみ、人形の健気な奮闘に協力しようとする。その作品にひとびとを引き入れるためには、浄瑠璃の語りがよっぽど巧みでなければならぬ。近松は、その語り言葉の巧みさで、人形に魂を入れさせることのできた天才であったと思う。

目次

わたくしと近松……………1

曾根崎心中……………9

お初、徳兵衛……………10

いのちの敵、銀の仇……………20

この世も名残……………29

堀川波鼓……………37

因果の始まり……………38

お種の自害……………50

女敵討ち……………62

冥途の飛脚……………69

地獄への旅立ち……………70

梅川の身請け・・・・・・・・・・・・・・・・79

断てぬ親子の情愛・・・・・・・・・・・・91

大経師昔暦

・・・・・・・・・・・・・・・・101

仇のはじめ・・・・・・・・・・・・102

親子の別れ・・・・・・・・・・・・116

茂兵衛、おさんの召し捕り・・・・・・・・127

悲しき最期・・・・・・・・・・・・134

国性爺合戦

・・・・・・・・・・・・・・・・141

大明国と韃靼国の戦い・・・・・・・・142

国性爺合戦のいわれ・・・・・・・・154

悲しき親子対面・・・・・・・・・・・・162

梅檀皇女、故郷へ・・・・・・・・・・・・168

大明国の勝利・・・・・・・・・・・・176

心中天の網島……………181

涙の裏切り……………182

賢夫人おさん……………197

治兵衛、小春の道行……………214

この世の別れ……………218

女殺油地獄……………223

野崎詣り……………224

放蕩者と兵衛……………235

お吉殺し……………245

語注……………田中澄江……………259

解説……………内山美樹子……………261

参考図……………穂積和夫……………269

装幀……………菊地信義……………

写真提供・協力……………厳島神社・(株)紫紅社・大阪市立博物館・国立劇場・文楽協会……………

田中澄江の心中天の網島

本文中、▼印は巻末に語注のある用語です。

曾根崎心中

お初、徳兵衛

観世音菩薩は、安樂世界から現世に姿をおあらわしになった大慈大悲の御仏として、ひとびとの深い信仰を集めていた。

西国三十三か所は、養老の昔、大和（奈良県）の長谷寺の徳道上人によつてはじめられ、かしこくも平安の頃、花山法皇がそのあとを慕い、おんみずから亡くなられた愛妃の菩提のために、巡礼の旅をつづけられて、那智（和歌山県）から美濃（岐阜県）までの、三十三か寺の観音霊場を定められたとの伝承がある。

この大阪にも三十三か寺をえらんで、これらを巡礼すれば、西国三十三か所をまわるのと同じ功德があると言われ、一番の天満の大融寺から、三十三番の平野町新御霊境内の十一面観音まで、夜の明け初めた朝早くから、日の暮れかかる夕方にかけて詣るのがひとびとの間に盛んであった。

内本町平野屋の手代徳兵衛が、商売ものの醤油樽をかついだ丁稚をお供に、青葉若葉の匂う四月六日の夕暮れどき、新御霊に近い生玉神社の境内にやってくると、かたわらの水茶屋の床から若い女の声がして、あれ、徳様じゃないの。徳様、徳様と呼ぶ。なつかしい天満屋のお初の声である。そのひとゆえの悩みに、今日も焦がれる胸を神だのみに、ここまで来

たのだと、徳兵衛は編み笠のうちら女にそつと合図し、丁稚にはそのまま得意先をまわるように指示した。

「さあ、早くお行き」

「へい」

「道頓堀にはよるんじゃないぞ」

遊び場には近づくなど、釘をさしてあとを見送り、自分は店の簾を上げ、

「どうしてこんなところに」

編み笠をぬこうとするのを、あわててお初はとめた。今日は田舎のお客と、三十三か所の観音詣りをして、ここで休んでいるところだけれど、晩になったら酒盛りがはじまる。ちょっと今近くまで役者の声色を聞きに行っただけですぐ帰る。駕籠かきの連中もみな顔見知りだから、面倒なことになっても困る。どうぞ笠はそのままといいながら、身をよせてきて、どうしてこの頃は、とんと顔を見せてくれないのと嘆いた。

たよりをしたくても、お店の首尾はいかがと案じられてそれもできぬ。いつも行きつけの丹波屋に何べんも足を運んだけれど、ここにも何のおとずれもないと言う。在所へ行ったという話も聞いたけれど、それも本当かうそかもわからぬ。

「ほんとにひどい。ひどすぎますよ。私などどうでもいいということ？ それであなたの気持ちはおすみなのか？ 私は病気になってしまふ。ほら、ごらんさいな。こんなに胸がつか

えて」

女は男の手を取って、自分の懷に入れながら泣いた。徳兵衛は黒髪もつやつやとして、色白の雛人形のようなやき男。女は十八、九の花の顔。それも咲き出しの初花のようで、まことに似合いの夫婦とも言いたい姿である。

女の口説き泣きに、自分も涙しながらうなずき、

「おお、無理もない、無理もない。でもお前さんに言つて、かえつて心配かけても可哀相と、この間からずっと自分一人で苦しんで来たのだ」

そんなに一人で苦しんでいないで、なぜ打ち明けてくれなかった。なぜかくしていた。それは水くさいというものと、女は男の膝にもたれてさめぎめと泣いた。男は、泣くな恨むなとしきりになだめ、かくしたわけではないけれど、言つても埒があかぬこと。でも、おおかた片がついたと、女をひとまず安心させた事情は、男に結婚問題が起ったことであつた。

店の旦那とは、現在の叔父甥の間柄なので大事にしてくれるし、自分も一生懸命の奉公をして、正直一筋にやつて来た。そこを見込んで、お内儀の姪を嫁に迎えよう、銀二貫目の持参金も持たせようという話になったが、かねてからお初に馴染んでいた自分としては、とても引き受けられない話である。第一、自分には話さずに頭ごなしに在所の母御に話をつけ、金までわたしたというのは何ごと。先月のうちに、もう結納の式をあげさせようと言われてびっくり、申しわけないが、はじめて叔父夫妻に抗議をした。

「私が承知しないうちに、在所の老母を味方につけ、足元から鳥がとびたたんばかりに式をあげよとは、あまりななされようでございます」

「お前は、姪が氣にいらぬというのじゃな」

「はい。お内儀様のお言葉を返すようでございますが、今までお嬢様お嬢様とお呼び申し上げていたおひとを、持参金と共にもらい受け、一生女房として御機嫌とりをしてゆくことなど、とても私にはできぬ。叶わぬことでございます。徳兵衛の面目がたちませぬ。たとえば亡くなった親父おやじが生きかえって、そのように申してもことわります」

徳兵衛のはっきりした物言いに、叔父が立腹し、蜷川しじみがわの廓くわの天満屋にお初という妓よめがいることは聞いている、それで女房の姪がいやというのかと迫った。

「この上は姪はやらぬ。やらぬからには、ちゃんと商売の勘定をつけ、四月七日までに二貫目の金を返してくれ」

そのあととは家を追い出し、大阪の土地にはおかぬというきびしい仕儀である。徳兵衛も男の意地で承知しましたと田舎へ走り、母親にかけあったが、この継母は一度握った金は絶対放さぬという欲深のもの、仕方なく京の友達のところに行って頼んだが駄目だめで、また村に引き返し、村の衆の口ぞえで継母に詫わびを入れ、ようやく金を返してもらって来た。

これで勘定をすます目あてはついたが、叔父の言葉通り、大阪にいられなくなったらどうしよう。そうしたら、かわいいお前にもあえない。たとえば首を碎かれて蜷川の底に投げ棄すて

られてもいい。おれはお前にあいつづけたいと、男泣きに泣いた。お初も共々に泣いたが、せきくる涙を抑えて健気けんげにも言うのであった。

「ほんとに私のために、そんなに苦勞をさせて、もったいないやらうれしいやら。でもねえ、徳兵衛さん。しっかりして下さいな。大阪を追い出すって言われたって、火つけや盗みを働いたわけじゃないでしょう。私がなんとかでもして、あなたをかくまってみせますよ。どうしてもあえないとなったら、この世ばかりが二人の生きる世界でもないでしょう。世間によくあることですよ。二人で死ねばいいんでしょう。死んだら死出しでの山、三途さんずの川まで追ってくるものもない。二人で手にとって行けば、怖いことなんて何一つない」

徳兵衛はつとめといっても叔父甥の仲、どこかおっとりしているふうがあつて、それがこの若者の魅力になっている。お初はこの若さで苦界くがいに身を沈めて、楼主や朋輩ほうばいとの中をうまく泳ぎ抜け、夜ごとの客の機嫌にも知恵才覚を働かさなければならぬ身。年は下でも、外見はげまし、七日といえbaumう明日のこと、どうせ返す金なら早く返して、旦那を安心させたほうがいいと言えbaum、徳兵衛は相変わらず浮かぬ表情で、じつはその金を油屋あぶらやの九平次くへいじに貸してしまったと言う。

「え？ あの九平次に？」

「おお、先月の晦日みそかにあったとき、たった一日でいい、貸してくれ。三日の朝は必ず返すと